『躬恒集』注釈（九）

平沢竜介・大久保壽子・玉木紗也香・西村瑠美子・
原口理恵・町田英美・渡邊範子・渡辺優子

664
（230）

躬恒答ふ

夜昼の数は三十日にあまらぬをなど長月と人の言ふらむ

【他出文献】

又とふ　伊衡

よるひるのかずはみそぢにあまらぬをなど長月といひはじめけん　（拾遺和歌集・巻九・雑下・五二二）

これひら

よるひるのかすはみそかにあまらぬをなそなか月といひはしめけん　（忠岑集Ⅳ・一三二）

【語釈】

○三十日―底本は「よそか」。〈乙〉本によって校訂する。〈内〉本は「みそち」。○人の言ふらん―〈内〉本は「いひはしめけん」。

【通釈】

躬恒（みつね）が答える

夜昼の数は三十日を越えることはないのに、どうして長月と人はいうのだろう。

▽詞書は「これひらとふ」という形がふさわしいか。

【類歌・参考】

題しらず　よみ人も

名にしおへばなが月ごとに君がためかきねの菊はにほへとぞ思ふ　（後撰和歌集・巻七・秋下・三九八）

天暦御時九月十五日、斎宮くだり侍りけるに　御製

君が世を長月とだにおもはずはいかに別れのかなしからまし　（拾遺集・巻六・別・三〇九）

保延二年法金剛院に行幸ありて、菊契多秋といへるこころをよませ給うけるに、よみ侍りける

法性寺入道前太政大臣

君が代をなが月にしもしら菊のさくや千とせのしるしなるらん　（千載和歌集・巻十・賀・六一九）

のこりのきく

霜のをける残りの菊は長月のなかきためしに匂ふ也けり　（実頼集（清慎公集）・一〇七）

のこるきく

霜のおくのこりのきくはなか月のなかきためしにゝほふなるらし　（伊勢大輔集Ⅱ・六九）

665
(231)

忠岑答ふ

秋深みもの思ふ人の明かしかね夜を長月と言ふにやあるらん

【他出文献】

こたふ　みつね

秋ふかみこひする人のあかしかね夜を長月といふにやあるらん　（拾遺和歌集・巻九・雑下・五二三）

【語釈】

○もの思ふ――〈内〉本は「こひする」。○夜を長月――「長」と「長月」を掛ける。

【通釈】

忠岑が答える

秋が深まったので物思う人が夜を明かしかねて、夜が長い長月と言うのであろうか。

▽詞書は「みつねこたふ」がふさわしいか。

【類歌・参考】

ものましけるをむなの、斎宮のくだり侍りけるともにまかりける

にいひつかはしける　藤原道経

かへりこむほどをばしらずかなしきはよをなが月のわかれなりけり　（詞花和歌集・巻六・別・一七六）

だいしらず　正三位知家

いとどまた夜をながづきの名にたててあくるもしらぬ山のあさぎり　（続古今和歌集・巻五・秋下・四九五）

（題しらず）　好忠

いとどしく夜を長月に成りぬればね覚がちにてあかすべきかな　（新後拾遺和歌集・巻五・秋下・四三九）

延文百首歌に、九月尽の心を　前大納言実名

かぎりあれば夜をなが月のともし火もかかげつくして秋はいぬめり　（新続古今和歌集・巻五・秋下・六〇六）

666
(232)

忠岑

秋深み恋する鹿の明かしかね夜を長月と言ふにざりける

【語釈】

○夜を長月―「長」と「長月」を掛ける。

【通釈】

忠岑

秋が深まったので、恋する鹿が夜を明かしかねて、夜が長い長月というのだなあ。

▽この歌は底本にはないが、『忠岑集』より補う。

【類歌・参考】

つまごひにかなくやまへのあきはぎはつゆしもさむみさかりすぎゆく　（万葉集・巻八・一六〇四・石川広成）

寛平御時后宮歌合歌　よみ人しらず

あきやまにこひするしかのこゑたててなきぞしぬべき君がこぬよは　（続古今和歌集・巻十三・恋三・一一九四）

建保三年、内裏歌合に　信実朝臣

秋の野の尾花にまじる鹿のねは色にやつまを恋ひわたるらん　（新後撰和歌集・巻四・秋上・三一六）

妻こふるしかの涙や秋はきのした葉もみつる露と成らん　（貫之集Ⅰ・四〇八）

六

667
(232)

躬恒

空に立つ春の霞とわが恋と尽きせぬものはいづれまされり

【他出文献】

心に思ふ事を躬恒とふたりかたふる

そらにたつはるのかすみとわかこひとつきせぬものはいつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一一一）

みつね、たゝみねか、ゝたみにおもひけることを、とひこたへける

みつね

そらにたつはるのかすみとわかこひとつきせぬものはいつれまされり　（忠岑集Ⅳ・九六）

【通釈】

躬恒

空に立つ春の霞と私の恋と、なくならないものという点ではどちらがまさっているのか。

【類歌・参考】

うちよする浦波みれは我恋のつきぬるとこそまつしられけれ　（貫之集Ⅰ・六五五）

（題しらず）　在原棟梁

わが恋のかずにしとらば白妙のはまのまさごもつきぬべらなり　（後撰和歌集・巻十・恋二・六四三）

ものいひわたりけるをむな、おやなどにつつむことありてこころにもかなはざりければよめる

源政成

あふまでやかぎりなるらんとおもひしをこひはつきせぬ物にぞ有りける（後拾遺和歌集・巻十二・恋二・七四七）

ありへてはいかゝなるへきわれなからつきせぬこひのはてそゆかしき　（長方集・一四七）

668
(233)

忠岑

立ゝぬ日も立つ日も霞あるものをいかなる世にか恋は絶ゆべき

【他出文献】

返し

たゝぬ日もたつ日もかすみあるものをいかなる世にかこひはたゆへき　（忠岑集・Ⅲ・一一二）

たゝみね

たゝぬ日もたつひもかすみあるものをいかなるよにかこひはたゆへき　（忠岑集・Ⅳ・九七）

【語釈】

○霞あるものを―〈御〉本「すにあるものを」。

【通釈】

ただみね

立たない日も立つ日も霞はあるけれど、どのような世に恋が絶えることがあるだろうか。

【類歌・参考】

崇徳院に百首歌たてまつりける時、恋歌とてよめる　皇太后宮大夫俊成

恋をのみしかまのいちにたつ民のたえぬおもひにみをやかへてん　（千載和歌集・巻十四・恋四・八五七）

千五百番歌合に　宜秋門院丹後

時しらぬ恋はふじのねいつとなくたえぬ思ひに立つけぶりかな　（続千載和歌集・巻十二・恋二・一一六七）

恋歌中に　源兼氏朝臣

恋ひわたる心ばかりやたえざらんくめぢのはしのよるの契りは　（続千載和歌集・巻十四・恋四・一四七四）

人のもとにつかはしける　　藤原範永朝臣

昔より恋は絶えせぬ身なれどもつらき人にはならはざりけり　（続後拾遺和歌集・巻十二・恋二・七四三）

669
(234)　躬恒（みつね）

君恋ひに消（き）え返（かへ）る身と草の葉に置（を）く白露（しら）といづれまされり

【他出文献】

みつね

きみこひにきてかへりみとくさの葉にをくしら露のいつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一一三）

みつね

きみこひてきえかへる身とくさのはにおくしらつゆといつれまされり　（忠岑集Ⅳ・九八）

【語釈】

○君恋ひに―あなたを恋しく思って。○消え返る―すっかり消える。すっかり心も消える。

【通釈】

躬恒

あなたを恋しく思ってすっかり心も消えてしまいそうな我が身と、草の葉に置く白露とどちらがまさっているだろうか。

▽恋するわが身と朝には消える白露のどちらがはかない存在なのか。

【類歌・参考】

（題しらず）　紀とものり

わがやどの菊のかきねにおくしものきえかへりてぞこひしかりける　（古今和歌集・巻十二・恋三・五六四）

紅葉と色こきさいでとを女のもとにつかはして　みなもとのととのふ

君恋ふと涙にぬるるわが袖と秋のもみぢといづれまされり　（後撰和歌集・巻七・秋下・四二七）

あひしりて侍りける人のもとに、返事みむとてつかはしける　本良のみこ

くやくやとまつゆふぐれと今はとてかへる朝といづれまされり　（後撰和歌集・巻九・恋一・五一〇）

（題しらず）　よみ人しらず

やほかゆくはまのまさごとわがこひといづれまされりおきつしらなみ　（拾遺和歌集・巻十四・恋四・八八九）

670
(235)　忠岑

恋はたゞ命にかけてあるものをいかなる世にか露は絶ゆべき

【他出文献】

返し

こひはたゝいのちにかへてあるものをいかなる世にか露はたゆへき　（忠岑集Ⅲ・一一四）

たゝみね

こひはたゝいのちにかけてあるものをいかなるよにかつゆはたゆへき　（忠岑集Ⅳ・九九）

【語釈】

○命にかけて―命をかけて。命に託して。

【通釈】

忠岑

恋はただ命をかけてあるものだが、どんな世に露が絶えることがあろうか。

▽恋は命が終われば終わりだが、露はいつの世にも絶えることがないから、恋の方がはかないものだ。

【類歌・参考】

女をうらみて、さらにまうでこじとちかひてのちにつかはしける　実方朝臣

何にせむ命をかけてちかひけんいかばやと思ふをりも有りけり　（拾遺和歌集・巻十四・恋四・八七一）

題不知　馬内侍

くもでさへかきたへにけるささがにのいのちをいまはなににかけまし　（後拾遺和歌集・巻十三・恋三・七六九）

恋の心を人人のよみけるによめる　律師実源

いのちをしかけて契りしなかなればたゆるはしぬる心ちこそすれ　（金葉和歌集二・巻七・恋上・四〇三）

躬恒（みつね）

671（236）　世の中に思（おも）ひいたらぬ隈（くま）なしと空吹（そらふ）くといづれまされり

【他出文献】

みつね

よの中をおもひいたらぬくまなきにそらふく風といつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一一五）

よの中におもひいたらぬくまなきとそらふくかせといつれまされり　（忠岑集Ⅳ・一〇〇）

【語釈】

○思ひいたらぬ―底本は「おもひはたえぬ」。『忠岑集』Ⅲ・Ⅳによって校訂する。○隈なしと―底本は「くさなしと」。〈御〉〈乙〉本によって校訂する。○空吹く風―底本は「そらなるかげ」。『忠岑集』Ⅲ・Ⅳにより校訂する。

【通釈】

躬恒

男女の仲で思い至らない所がないのと、空吹く風が至らない所がないのと至らない所がないという点でどちらがまさっているのか。

【類歌・参考】

題しらず　　微安門院

くまもなくねやのおくまでさしいりぬむかひの山をのぼる月かげ　（風雅和歌集・巻六・秋中・五八五）

五十首歌をたてまつりしに、山家月の心を　　前大僧正慈円

山ざとに月はみるやと人はこず空行く風ぞこの葉をもとふ　（新古今和歌集・巻十六・雑上・一五二〇）

672
(237)

忠岑

思ひやる心のほどは隈もなし風のいたらぬ隈は多かり

【他出文献】

おなしうた

おもひやるこゝろのほとはゝてもなし風のいたらぬくまはおほかり　（忠岑集・Ⅱ・一一五）

返し

おもひやるこゝろの程ははてもなしかせはいたらぬくまもおほかり　（忠岑集・Ⅲ・一一六）

たゝみね

おもひやるこゝろのほとははてもなしかせのいたらぬくまはおほかり　（忠岑集・Ⅳ・一〇一）

【語釈】

○心のほどは―〈乙〉本は「こゝろのくまは」。○隈もなし―底本は「くさもなし」。〈乙〉本によって校訂する。〈御〉本は「いまもなし」。○隈は多かり―底本は「くさはおほかり」。〈御〉〈乙〉本によって校訂する。

【通釈】

忠岑

思いやる心の範囲は行き渡らぬところはない。風が至らない物陰は多い。

【類歌・参考】

（題しらず）　（読人しらず）

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢ぢにあふ人のなき　（古今和歌集・巻十一・恋一・五二四）

題しらず　大江千古

思ひやる心にたぐふ身なりせばひとひにちたび君はみてまし　（後撰和歌集・巻十・恋二・六七八）

673
(238)　躬恒（みつね）

人（ひと）しれず浮（う）きたる恋（こひ）をする人と空行（そらゆ）く雲（くも）といづれまされり

【他出文献】

みつね

人しれぬうきたる恋をする人をそらゆく雲といつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一一七）

みつね

人しれすうきたるこひをするひと、そらふくかせといつれまされり　（忠岑集Ⅳ・一〇二）

【語釈】

○人しれず―底本は「ひとはれす」。〈乙〉本によって校訂する。〈御〉本は「いとはれぬ」。○浮きたる―落ち着かない。不安定な状態にある。○空行く雲―底本は「そらゆく月」。忠岑集Ⅲにより校訂する。

【通釈】

躬恒

人に知られず心が身にそわない恋をする人と、空を動いてゆく雲とどちらがまさっているだろうか。

▽人知れぬ恋をする人と空の雲とどちらが不安定なのか。

【類歌・参考】

（題しらず）　ただみね

たきつせにねざしとどめぬうき草のうきたるこひも我はするかな　（古今和歌集・巻十二・恋二・五九二）

題しらず　くろぬし

玉津島ふかき入江をこぐ舟のうきたるこひも我はするかな　（後撰和歌集・巻十一・恋三・七六八）

674
(239)　風吹けば空に群れたる雲よりも浮きて恋ひする人ぞまされり
忠岑

【他出文献】

返し

かせふけはそらにむらかる雲よりもうきてこひする人はまされり　（忠岑集Ⅲ・一一八）

たゝみね

かせふけはそらにむらちるくもよりもうきてこひする人はまされり　（忠岑集Ⅳ・一〇三）

【語釈】

○空に群れたる―空に群がっている。空に群れをなす。

【通釈】

忠岑

風が吹くと空に群がって動く雲よりも、心が身にそわない恋をする人がまさっている。

▽「浮きて恋ひする人」の方が、「空に群れたる雲」が風に吹かれてふらふらするよりも不安定だ。

【類歌・参考】

（題しらず）　（読人しらず）

あさなあさな立つ河霧のそらにのみうきて思ひのある世なりけり　（古今和歌集・巻十一・恋一・五一三）

（題しらず）　（読人しらず）

篝火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ　（古今和歌集・巻十一・恋一・五二九）

（題しらず）　（よみ人しらず）

吹く風に雲のはたてはとどむともいかがたのまん人の心は　（拾遺和歌集・巻十四・恋四・九〇二）

675
（240）

躬恒（みつね）

恋（こ）ひわびて出（い）づる涙（なみだ）の尽（つ）きせぬと春（はる）のながめといづれまされり

【他出文献】

みつね

こひ侘ておつるなみたのつきせぬに春のなかめといつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一一九）

みつね

こひわひていつるなみたのつきせぬとはるのなかめといつれまされり　（忠岑集Ⅳ・一〇四）

【語釈】

○尽きせぬと―底本は「つきせねは」。〈御〉〈乙〉本によって校訂する。○恋ひわびて―恋に悩んで。恋いわずらって。○春のながめ―「ながめ」に「眺め」と「長雨」を掛ける。

【通釈】

躬恒

恋に悩んで流れ出る涙が尽きないのと、もの思いに耽って見る春の長雨とどちらのつらさがまさっているだろうか。

【類歌・参考】

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　藤原としゆきの朝臣

恋ひわびて打ちぬる中に行きかよふ夢のただぢはうつつならなむ　（古今和歌集・巻十二・恋二・五五八）

権中納言俊忠、中将に侍りける時、歌合し侍りけるに、恋歌とてよめる　伊与三位藤原敦兼朝臣母

恋わびてあはれとばかりうちなげくことよりほかのなぐさめぞなき　（千載和歌集・巻十四・恋四・八五一）

やよひのついたちよりしのびに人にものらいひてのち、雨のそほふりけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめくらしつ　（古今和歌集・巻十三・恋三・六一六）

（題しらず）　（よみ人しらず）

年ごとに春のながめはせしかども身さへふるともおもはざりしを　（拾遺和歌集・巻十六・雑春・一〇五七）

676
(241)　忠岑（たゞみね）

身を知（し）れば落（お）つる涙（なみだ）はあはれなり春のながめはつねの古言（ふるごと）

【他出文献】

返し

身をしれはいつれ涙はあはれなりはるのなかめはつねのふること　（忠岑集・Ⅲ・一二〇）

たゝみね

みをしれはいつるなみたもあはれなりはるのなかめはつねのふること　（忠岑集・Ⅳ・一〇五）

【語釈】

○身をしれば―我が身の上を知る。○涙は―〈乙〉本「涙も」。

【通釈】

忠岑

我が身の上を知ると落ちる涙は悲しいことだ。春の長雨を見ての物思いはあたりまえの昔からの言い伝えだ。

【類歌・参考】

藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける女をあひしりてふみつかはせりけることばに、いままうでく、あめのふりけるをなむ見わづらひ侍るといへりけるをききて、かの女にかはりてよめりける

在原業平朝臣

かずかずにおもひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる　（古今和歌集・巻十四・恋四・七〇五）

題しらず　西行法師

身をしれば人のとがとはおもはぬにうらみがほにもぬるる袖かな　（新古今和歌集・巻十四・恋四・一二三一）

新玉津島社三十首歌に、不逢恋を　宗久法師

身をしれば猶こそうけれいつの世につれなかりけるむくいなるらん（新続古今和歌集・巻十二・恋二・一一六四）

題しらず　藤原高範

身をしればこれをかぎりの別ぞといく暁かしたひ来ぬらむ　（新続古今和歌集・巻十三・恋三・一三〇二）

677
(242)　世の人のあだに立つ名と秋霧の空に降るとはいづれまされり

躬恒（みつね）

【他出文献】

世の人のあたにたつ名とあきゝりとそらにふるとはいつれまされり　みつね　（忠岑集Ⅲ・一二一）

よの人のあたにたつなとあきゝりのそらにたつなといつれまされり　みつね　（忠岑集Ⅳ・一〇六）

【語釈】

○あだに立つ名―いい加減に立てるうわさ。

【通釈】

躬恒

世の中の人がいい加減に立てるうわさと、秋霧が空に立つのとどちらがまさっているだろうか。

▽世間の噂に立つのと秋霧が立つのとどちらがひどさがまさっているか。

【類歌・参考】

女のあだなりといひければ　　あさつなの朝臣

まめなれどあだなはたちぬたはれじまよる白浪をぬれぎぬにきて　（後撰和歌集・巻十五・雑一・一一二〇）

院に三十首歌たてまつりし時、不遇恋　　入道前太政大臣

物おもふあだ名はたたじ夕煙なびかぬ中に恋ひはしぬとも　（新後撰和歌集・巻十一・恋一・八〇一）

治暦三年三月定綱朝臣歌合　　源基綱

朝まだきふる秋霧に夕ざれのはるのかすみは立ちまさりけり　（夫木和歌抄・巻二・春二・五一八）

678
(243)　忠岑

秋霧は立ゝぬ日もあり晴れもしぬ古りなん名をばいかゞとゞめん

【他出文献】

返し

秋きゝりはたゝぬおりもありはれもせぬふりなん名をはいかゝとゝめむ　（忠岑集Ⅲ・一二二）

たゝみね

あきゝりはたゝぬをりもありはれもせぬふりなんなをはいかゝさためん　（忠岑集Ⅳ・一〇七）

【語釈】

○古りなん名―「言い古されるだろう噂」。〈御〉本は「ふりにし名」。

【通釈】

忠岑

秋霧は立たない日もあり、晴れる時もある。言い古されるだろう噂をどのようにして止めようか。

【類歌・参考】

（題しらず）　凡河内みつね

秋ぎりのはるる時なき心にはたちゐのそらもおもほえなくに　（古今和歌集・巻十二・恋二・五八〇）

（題しらず）　（よみ人しらず）

秋ぎりのはれてくもればをみなへし花のすがたぞ見えがくれする　（古今和歌集・巻十九・雑体・一〇一八）

延喜御時に、秋歌めしければたてまつりける　紀貫之

秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける　（後撰和歌集・巻六・秋中・二七一）

（題しらず）　（つらゆき）

秋霧のたちしかくせばもみぢばはおぼつかなくてちりぬべらなり　（後撰和歌集・巻七・秋下・三九二）

679
(244)　躬恒(みつね)

逢(あ)はんとて待(ま)つ夕暮(ゆふぐ)れと夜(よ)をこめて行(ゆ)くあか月といづれまされり

【他出文献】

みつね

あはむとてまつゆふくれと夜をこめてゆくあかつきといつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一二三）

【語釈】

○夜をこめて―夜が深いうちに、夜明けにはまだ間があるうちに。

【通釈】

躬恒

逢おうといって待つ夕暮れと、夜が深いうちに恋しい人が帰っていく暁とではどちらのつらさがまさっているのか。

【類歌・参考】

（題しらず）　（よみ人しらず）

こぬ人をまつゆふぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ　（古今和歌集・巻十五・恋五・七七七）

百首歌たてまつりし時　入道前太政大臣

いかなれば待つ夕暮れはつえなくて契らぬ夢に人のみゆらん　（続後拾遺和歌集・巻十二・恋二・七三八）

題しらず　つらゆき

いかで我人にもとはん暁のあかぬ別やなににたりと　（後撰和歌集・巻十二・恋三・七一九）

680
(245)　忠岑

待つほどは頼みも深し夜をこめて起きて別るゝことはまされり

【他出文献】

返し　たゝみね

待程はたのみもふかし夜をこめておきてわかるゝ恋はまされり　（忠岑集・Ⅲ・一二四）

まつほとはたのみもふかしよをこめてゆくあか月のことはまされり　（忠岑集・Ⅳ・一〇九）

【語釈】

○頼みも深し―あてにする気持ちも深い。頼りにする気持ちも深い。

【通釈】

忠岑

待っている間は頼りにする気持ちも深い。夜が深いうちに起きて別れる方がつらさはまさっている。

【類歌・参考】

別恋　　朔平門院

いまはとておきてわかるる床のうへにとまる枕もくれやまつらん　（玉葉和歌集・巻十・恋二・一四四一）

恋の歌の中に　　達智門院

はかなしや又はいつともしら露のおきて別るる袖に消えなば　（続後拾遺和歌集・巻十三・恋三・八三八）

681
(246)　わたつみの千尋の底と限りなく深き思ひにいづれまされり
　　躬恒

【他出文献】

わたつ海のちひろのそことかきりなくふかきおもひといつれまされり　みつね　（忠岑集Ⅲ・一二五）

わたつうみのちいろのそことかきりなくふかきおもひといつれまされり　みつね　（忠岑集Ⅳ・一一〇）

【語釈】

○わたつみ―海。〈御〉本は「わたつうみ」。○千尋―非常に深いこと。〈御〉本〈乙〉本は「ちひろ」。○深き思ひに―深い思いと比べて。

【通釈】

躬恒

海のとても深い底と、限りなく深い思いと比べてどちらがまさっているだろうか。

【類歌・参考】

身よりあまれる人を思ひかけてつかはしける　紀友則

玉もかるあまにはあらねどわたつみのそこひもしらず入る心かな　（後撰和歌集・巻十一・恋三・七九八）

題しらず　よみ人しらず

渡つ海のふかき心は有りながらうらみられぬる物にぞ有りける　（拾遺和歌集・巻十五・恋五・九八三）

題不知　貫之

わたつ海の千尋の神に手向するぬさのおひ風やまずふかなん　（新千載和歌集・巻八・羈旅・七六二）

題しらず　贈太政大臣

ふかき思ひそめつといひし事のははいつか秋風ふきてちりぬる　（後撰和歌集・巻十八・雑四・一二七三）

堀河院の御時、百首歌たてまつりける時よめる　前中納言匡房

みづ鳥の玉ものとこのうき枕ふかきおもひはたれかまされる　（千載和歌集・巻六・冬・四三一）

682
(247)

忠岑

深けれど千尋の底は数知りぬ人の思ひは棹もさゝれず

【他出文献】

（だいしらず）　壬生忠岑

ふかけれどちひろのうみはほどしりぬ人のおもひはさをもおよばず　（続古今和歌集・巻十九・雑下・一八四九）

かへし

ふかけれと千尋の底はかすしらぬ人のおもひはさほもさゝれす　（忠岑集Ⅲ・一二六）

たゝみね

ふかけれとちいろのそこはかすしりぬひとのおもひはさをもさゝれす　（忠岑集Ⅳ・一一一）

【語釈】

○数知りぬ―深さがわかる。〈乙〉本「かすしらす」。○棹もさゝれず―棹もさせない程深い。

【通釈】

忠岑

深いけれど千尋の底は深さがわかる。人の思いは棹もさせない程深いものだ。

【類歌・参考】

（やよひのしもの十日ばかりに、三条右大臣かねすけの朝臣の家にまかりて侍りけるに、ふぢの花さけるやり水のほとりにて、かれこれおほみきたうべけるついでに）

貫之

さをさせどふかさもしらぬふちなれば色をば人もしらじとぞ思ふ　（後撰和歌集・巻三・春下・一二七）

三条右大臣の屏風に　（つらゆき）

玉もかるあまのゆき方さすさをの長くや人を怨渡らん　（拾遺和歌集・巻十九・雑恋・一二七二）

題しらず　（よみ人しらず）

わたつうみのちひろのそこもかぎりあればふかき心をなににたとへん　（続後撰和歌集・巻十一・恋一・六九五）

躬恒（みつね）

683
(248)　つれもなき人のつらさを見るよりも身を投（な）げつるといづれまされり

【他出文献】

みつね

つれもなき人のつらさをみるよりは身をなけつるといつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一三五）

みつね

つれもなき人のこゝろをみるよりは身をなけつるといつれまされり　（忠岑集Ⅳ・一一二）

【語釈】

○見るよりも―〈乙〉本「みるよりは」。

【通釈】

躬恒

私につれない人の冷淡さを見る、それよりもいっそ身を投げてしまうのとどちらがまさっているだろうか。

【類歌・参考】

（題しらず）　（読人しらず）

つれもなき人をやねたくしらつゆのおくとはなげきぬとはしのばぬ　（古今和歌集・巻十一・恋一・四八六）

（題しらず）　（読人しらず）

つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつるかな　（古今和歌集・巻十一・恋一・五二一）

（題しらず）　むねゆきの朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもはおかなむ　（古今和歌集・巻十五・恋五・八〇一）

（題しらず）　　（よみ人しらず）

世中のうきたびごとに身をなげばふかき谷こそあさくなりなめ　　（古今和歌集・巻十九・雑体・一〇二六）

684
(249)　忠岑（ただみね）

憂（う）しと言ひてあやななどしも身を投げん生（い）きてある身のことはまされり

【他出文献】

返し

うしとてもあやな何かは身をなけんいきてある身のことはまされり　　（忠岑・Ⅲ・一三六）

たゝみね

うしといひてあやなゝとしも身をなけんいきてあるみのことはまされり　　（忠岑・Ⅳ・一一三）

【語釈】

○あやななとしも―底本は「あやなことしも」。〈御〉本〈乙〉本によって校訂する。

【通釈】

忠岑

つらいと言ってわけもなくどうして身を投げよう。生きている身のほうがまさっている。

【類歌・参考】

まあだあはず侍りける女のもとに、しぬべしといへりければ、返事にはやしねかしといへりければ、又つかはしける　（よみ人しらず）

おなじくは君とならびの池にこそ身をなげつとも人にきかせめ　（後撰和歌集・巻十二・恋四・八五五）

中院入道右大臣中将に侍りける時、歌合し侍りけるに、恋の歌とてよめる　藤原宗兼朝臣

恋ひわたる涙の川にみをなげんこの世ならでもあふせありやと　（千載和歌集・巻十二・恋二・七一五）

題しらず　よみ人しらず

山ぶきはあやななさきそ花見むとうゑけむ君がこよひこなくに　（古今和歌集・巻二・春下・一二三）

躬恒（みつね）

685
（250）　はるゞゝと山の端（は）さして行（ゆ）く月と過（す）ぎ行（ゆ）く秋（あき）といづれまされり

【他出文献】

はるゞゝと山のはさしている月とすきゆく秋といつれまされり　みつね　（忠岑集Ⅲ・一三七）

はるゞゝと山のはすきてゆく月とすきゆくあきといつれまされり　みつね　（忠岑集Ⅳ・一一四）

【語釈】

○はるゞゝと―（行き先または過ぎてきた）道のりの長い様子。○行く月と―〈乙〉本は「いる月と」。○過ぎ行く秋―底本は「すきゆく月」。『忠岑集』Ⅲ・Ⅳによって校訂する。

【通釈】

躬恒

長い道のりを山の端を目指して行く月と、過ぎて行く秋とどちらがまさっているだろうか。

▽山に入ろうとする月と過ぎていく秋とどちらが惜しく思われるのか。

【類歌・参考】

（題しらず）　（よみ人しらず）

あかずして月のかくるる山本はあなたおもてぞこひしかりける　（古今和歌集・巻十七・雑上・八八三）

これたかのみこのかりしけるともにまかりてやどりにかへりて夜ひとよさけをのみ物がたりをしけるに、十一日の月もかくれなむとしけるをりに、みこゑひてうちへいりなむとしければよみ侍りける

なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月のかくるるか山のはにげていれずもあらなむ　（古今和歌集・巻十七・雑上・八八四）

おなじつごもりの日によめる　みつね

道しらばたづねもゆかむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり　（古今和歌集・巻五・秋下・三一三）

九月のつごもりに　つらゆき

長月の在明の月はありながらはかなく秋はすぎぬべらなり　（後撰和歌集・巻七・秋下・四四一）

686
(251)

忠岑（たゞみね）

秋果（あきは）つることはしばしもまさりなん入（い）りぬる月は夜（よ）の間（ま）ばかりぞ

【他出文献】

返し

あきはつる事はあはれもまさりなむいりぬる月をたのむはかりそ　（忠岑集Ⅲ・一三八）

たゝみね

あきはつることはあはれもまさりなんいりぬる月はよのまはかりを　（忠岑集Ⅳ・一一五）

【語釈】

○秋果つる―秋が終わる。○夜の間ばかりぞ―夜の間だけだ。

【通釈】

忠岑

秋の終わることの方が少し勝っているだろう。入ってしまう月は、夜の間ばかりだ。

▽秋の終わりは何日かあるが、月が山の端に入るのは夜の間ばかりで、惜しむ気持が長く続くのは秋の終わりの方だ。

【類歌・参考】

（題しらず）　（よみ人しらず）

かれる田におふるひつちのほにいでぬは世を今更に秋はてぬとか　（古今和歌集・巻五・秋下・三〇八）

わすれにけるをとこの、もみぢををりておくりて侍りければ　（よみ人も）

思ひいでて問ふにはあらじ秋はつる色の限を見するなるらん　（後撰和歌集・巻七・秋下・四三九）

（題しらず）　（よみ人も）

秋はてて時雨ふりぬる我なればちることのはをなにかうらみむ　（後撰和歌集・巻八・冬・四四八）

（題しらず）　源俊定朝臣

風そよぐ軒ばの竹にもる月のよのまばかりぞ夏も涼しき　（新後撰和歌集・巻三・夏・二二一）

687
(252)

躬恒（みつね）

あだ人を頼（たの）まんほどゝ雁（かり）の子を重（かさ）ねて見んといづれまされり

【他出文献】

みつね

あた人をたのまんほとゝかりのこをかさねて見むといつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一三九）

みつね

あた人をたのまんことゝかりのこをかさねてみんといつれまされり　（忠岑集Ⅳ・一一六）

【語釈】

○あだ人―浮気な人。○頼まん―底本「たのまぬ」。〈乙〉本によって校訂する。○雁の子を重ねて見ん―雁の卵を重ねて見ること。（難しいことの喩え）

【通釈】

躬恒

浮気な人をあてにするのと、雁の卵を重ねて見るのではどちらがまさっているだろうか。

▽浮気な人を頼りにするのと、雁の卵を重ねてみようとするのでは、どちら方が期待できることなのか。

【類歌・参考】

（題しらず）　よみ人しらず

あきといへばよそにぞききしあだ人の我をふるせる名にこそ有りけれ　（古今和歌集・巻十五・恋五・八二四）

かりのこを人のおこせて侍りければよみ侍りける　和泉式部

いくへづついくつかさねてたのまましかりのこの世のひとのこころは　（続千載和歌集・巻七・雑体・七五三）

かりのこをとをづつとをはかさぬとも人のこころをいかがたのまん　（古今和歌六帖・第四・二一九七）

むかし、男ありけり。うらむる人をうらみて、

鳥の子を十づつ十はかさぬとも思はぬひとを思ふものかは　（伊勢物語・五十段）

三月のつごもりがたに、かりのこの見ゆるを、これ十づつ重ぬるわざをいかでせむとて、手まさぐりに生絹の糸を長う結びてはゆひ、結びてはゆひして、引き立てたれば、いとよう重なりたり。なほあるよりはとて、九条殿の女御殿の御方に奉る。卯の花にぞつけたる。なにごともなく、ただ例の御文にて、端に、「この十重なりたるは、かうてもはべりぬべかりけり」とのみ聞こえたる御返り、

数知らず思ふ心にくらぶれば十重ぬるものとやは見る

とあれば、御返り、

思ふほど知らではかひやあらざらむかへすがへすも数をこそ見め

それより、五の宮になむ、奉れたまふと聞く。　（蜻蛉日記・康保三年）

688
(253)

忠岑

とりのこは重ねてしばしありぬとも人を頼まむ事のはかなさ

【他出文献】

又返し

とりのこはかさねてしはしありぬとも人をたのまむことのはかなさ　（忠岑集Ⅲ・一四〇）

【通釈】

忠岑

鳥の卵は重ねてしばらくそのままであるとしても、人を頼りにすることははかないことであるよ。

▽人の心を頼りにすることは、鳥の卵を重ねるよりも難しい。

【類歌・参考】

いぬかひのみゆ　（よみ人しらず）

鳥のこはまだひながらたちていぬかひの見ゆるはすもりなりけり　（拾遺和歌集・巻七・物名・三八三）

（題しらず）　素性法師

秋風の身にさむければつれもなき人をぞたのむくるる夜ごとに　（古今和歌集・巻十二・恋二・五五五）

寄松恋を　　皇太后宮大夫俊成

ふりにけるかはらのうへのまつがねのふかくはいかが人をたのまん　（続古今和歌集・巻十四・恋四・一二五六）

躬恒（みつね）

689
(254)　つらきをも憂（う）きをも言（い）はで頼（たの）まんと色（いろ）に出（い）でんといづれまされり

【他出文献】

みつね

つらきをもうきをもいはておもはんと色にいてむといつれまされり　（忠岑集Ⅲ・一四一）

みつね

つらきをもうきをもいはておもはんといろにいてんといつれまされり　（忠岑集Ⅳ・一一七）

【語釈】

○つらき―冷淡だ。薄情だ。

【通釈】

躬恒

薄情だという気持ちもつらいという気持ちも言わないで恋しい人を頼りにするのと、気持ちをに外に出してしまうのとどちらがまさっているだろうか。

【類歌・参考】

（題しらず）　（読人しらず）

人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花のいろにいでなむ　（古今和歌集・巻十一・恋一・四九六）

（題しらず）　（読人しらず）

おもふには忍ぶる事ぞまけにける色にはいでじとおもひしものを　（古今和歌集・巻十一・恋一・五〇三）

（天暦御時歌合）　平兼盛

しのぶれど色にいでにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで　（拾遺和歌集・巻十一・恋一・六二二）

690
(255)

忠岑（たゞみね）

憂（う）きことを言（い）ひてしるしのなきよりは心（こゝろ）にこめてあるはまされり

【他出文献】

たゝみね

うきことをいひてしるしのなきよりはこゝろにこめてあるはまされり　（忠岑集Ⅳ・一一八）

【語釈】

○しるし―効果、甲斐。○心にこめて―心に包み隠して。心の中に秘めて。

【通釈】

忠岑

つらいことを言って甲斐がないよりは、心の中に秘めている方がまさっている。

【類歌・参考】

鶯の花の木にてなくをよめる　みつね

しるしなきねをもなくかなうぐひすのことしのみちる花ならなくに　（古今和歌集・巻二・春下・一一〇）

題しらず　坂上是則

しるしなき思ひやなぞとあしたづのねになくまでにあはずわびしき　（後撰和歌集・巻十・恋二・六四五）

題しらず　貫之

しるしなき煙を雲にまがへつつよをへてふじの山ともえなん　（新古今和歌集・巻十一・恋一・一〇〇八）

しのびて人にもの申し侍りけるころ　和泉式部

なにごともこころにこめてしのぶるをいかでなみだのまづしりぬらん（続古今和歌集・巻十一・恋一・一〇二三）